否定とレトリックについての一考察

―「X も Y もない」の用法について―

伊藤 薫（いとう かおる）
京都大学大学院
ito.kaoru.38r@st.kyoto-u.ac.jp

1. はじめに

本論では、「相反するものを共に否定する表現」の意味について記述する。記述の対象として中心的に取り上げるのは、「X も Y もない」という表現であり、また、英語の *neither X nor Y* についても関連表現として取り上げる。本論で「相反するものを共に否定する表現」を取り上げる背景には、いわゆる「思考の原理」に反した（あるいは、反しているように見える）表現が、自然な言語使用においてどのように用いられるかという問題がある。

本論の意義は、大きく分けて次の 3 点が挙げられる。なお、これらは完全に独立的なものではなく相互に重なる部分もある。

・否定の研究に対する新たな知見の提供
・オクシモロンや緩叙法と「X も Y もない」の比較を通じた、修辞学的な知見の提供
・自然言語と論理の関わりの記述

まず、1 つ目に挙げた否定の研究に対する貢献であるが、従来から検討されてきた否定の意味の研究を基に、本論で取り扱う「X も Y もない」の形式に当てはまる表現について記述する。一見単純に見える 2 つのものを共に否定するための表現が、語用論的にいかに多様な意味を持つかということについて明らかにする。

2 つ目に挙げた修辞学的知見については、フィギュール（修辞学において研究されてきた、修辞的効果を生み出すための様々なパターン）研究の一環として、「X も Y もない」という形式の表現が多くのフィギュールと関わりのある形式であることを明らかにする。具体的には、フィギュールの一種であるオクシモロンや緩叙法、「ためらい」[1]との比較を通じ、思考の原理や会話の格率に対する違反がいかに解決されたり、含意を生じさせるかについて記述する。

3 つ目の論理と自然言語の関わりについては、常に偽であり情報的価値がゼロであるような表現が、どのように自然言語で用いられ、機能しているかについて記述する。また、あるものの否定が別のものの肯定となるかということについて、選言三段論法

©伊藤薫、「否定とレトリックについての一考察」
『言語科学論集』、第 18 号 (2012)、pp. 27-46

（後述）と自然言語の関わりを通して考察する。

なお、本論の構成は次のとおりになっている。まず、第 2 節では「X も Y もない」と関わる修辞学的な背景について述べる。第 3 節では、分析のために用いる言語学の諸概念を紹介する。第 4 節では、具体事例についての分析と考察を行う。第 5 節では、本論のまとめを行う。

2. 修辞学的背景

本節では、本論で取り扱う「X も Y もない」および *neither X nor Y* に関わる修辞学的背景について述べる。まず後に述べるフィギュールの基礎となる「思考の原理」について述べた後、オクシモロンをはじめとした矛盾律に反する表現、緩叙法、「ためらい」について紹介する。

2.1 思考の原理

思考の原理 (laws of thought) とは、アリストテレス以来の古典論理学において採用されている法則である。これは修辞学の概念ではなく論理学の概念であるが、本論で取り扱う「X も Y もない」や、後述のオクシモロンについて考える上で重要である。思考の原理は、次の 3 つからなる。

(1) *The low of identity:* 'Whatever is, is.'
(2) *The law of contradiction:* 'Nothing can both be and not be.'
(3) *The law of excluded middle:* 'Everything must either be or not be.'

(Russel 1967/1912: 40)

日本語では、(1) は同一律、(2) は矛盾律、(3) は排中律と呼ばれる。(2) と (3) は、論理記号を用いて書くと次のようになる。

(4) a. $\sim(\mathbf{p} \wedge \sim\mathbf{p})$
b. $\mathbf{p} \vee \sim\mathbf{p}$

（Horn 1989: 20, ただし"~"は命題の否定を表す。）

(4) は、二重否定の除去を認める立場 ($\mathbf{p} \equiv \sim\sim\mathbf{p}$) であれば、同一のものであるといえる。つまり、(a) は$\sim\mathbf{p} \vee \sim\sim\mathbf{p}$ となり、これは (b) と同一である。

2.2 思考の原理と相反するものの否定

本論で取り上げる「相反するものを共に否定する表現」は、2.1 節で取り上げた思考の原理のうち、排中律と関係する。厳密に排中律に反すると言えるのは「ある命題

について真でも偽でもない」と述べる場合である。しかし、自然言語の実際の使用においては、このような純粋な論理形式に従った表現ばかりが見られるわけではない。本論で問題とする「X も Y もない」では、X と Y の関係によっては排中律と関連する表現となることもある。したがって、本論では X と Y の関係を考慮にいれながら、この形式に当てはまる表現について見ていく。この X と Y の関係については、Horn (1989) のいう opposed terms（3.1 節で詳述する）の分類を参考にする。

2.3 矛盾律に関連した表現

本論で中心的に取り扱うのは排中律と「X も Y もない」との関連であるが、これを取り扱う背景として、これまで修辞学においてオクシモロン（「小さな巨人」など、相反する表現を結び付けたもの）をはじめとした矛盾律に違反した表現が扱われてきたということがある。また、一例ではあるが、相反するものを共に否定する表現もオクシモロンの一部だとする定義も存在する。

> Ils l'ont appellée un trait finement fou, qui mêle à la raison un air d'absurdité. On la définit une Figure qui affirme ou nie d'une même chose les deux contraires. C'est visiblement ce que nous appellons Paradoxe: ...
>
> 彼ら（＝古代ギリシアのレトリック研究家たち）はそれをオクシモロンと呼んだ。それは条理に不条理の雰囲気を纏わせるものである。《対義結合》は、あるひとつのものごとについて相反するふたつのことがらをともに肯定する、あるいはともに否定する“あや”として定義される。あきらかに、それはいわゆる“逆説”と呼ばれるものである。
>
> （Crevier 1765: 255　佐藤 (1981) の訳に加筆）

Crevier は上記のような定義をしているものの、具体的な表現としては矛盾律に違反した表現のみを取り扱っており、排中律に違反した表現は取り扱っていない。本論では、この排中律に違反した表現を取り扱い、それらの機能がどこまでオクシモロンと共通するかを考察したい。

また、矛盾律に違反することと排中律に違反することは、修辞学的にも同等、もしくは類似した価値を持つものと予測ができる。修辞学において、フィギュールは「通常の言語からの逸脱ないし偏差」（松尾 2007: 28）とされることがある。通常の言語を規定する規範は様々なものが考えられるが、その一例として松尾 (2007: 43) は Grice (1975) の協調の原理 (corporative principles) と会話の格率 (conversational maxims) を一例として挙げている。本論で取り上げる表現とオクシモロンは、共にこの格率に反すると考えられる。その中でも特に、質の格率ないしは様態の格率に反す

ると考えられる。例えば、矛盾律や排中律に反した表現は常に偽となるので、質の格率のうち「偽であることを言ってはいけない (Do not say what you believe to be false.) 」に違反すると考えられるし、様態の格率のうち「表現の曖昧さを避けよ (Avoid obscurity of expression.) 」や「多義性を避けよ (Avoid ambiguity.) 」に違反しているとも考えられる。どの格率に反するかについては様々な可能性が考えられるものの、矛盾律や排中律に反した表現は、思考の法則に則って言えば常に偽になるため、少なくとも質の格率には違反することになる。

2.4 否定と緩叙法

「X も Y もない」と関連したフィギュールとして、オクシモロンの他に緩叙法 (litotes) を挙げることができる。佐藤・佐々木・松尾 (2006) によれば、緩叙法の定義は次の通りである。

> いわんとすることの対義的な語句を用い、それを否定することによって、趣旨を表す技法。中核の意味はもとの趣旨に戻るが、そこに情感的ニュアンスが伴う。
> (佐藤・佐々木・松尾 2006: 394)

例えば、佐藤 (1992) は次のような表現を挙げている。

(5) a. あいつもなかなか、ばかじゃない
b. 安くない買いものだった……

(*ibid*.: 285)

(5a) では、「あいつ」が賢いという解釈がされることを意図して反義的な「ばか」を否定し、(5b) では「高い」買い物をしたという解釈がされることを意図して反義的な「安い」を否定している。「ばか」でないことは直接「賢い」を意味するわけではなく、普通の頭の良さである場合も含み、「安く」ないことは直接「高い」ことを意味するわけでなく、普通の値段である場合も含む。しかし、このような表現は「普通」であることを指していると解釈される場合は少ない。

2.5 ためらい（アポリア、aporia）

「X も Y もない」を扱う上でもう 1 つ触れておきたいのが「ためらい」（アポリア、aporia）[2]と呼ばれるフィギュールである。佐藤・佐々木・松尾 (2006) は、「ためらい」について次のように述べている。

> まず、《ためらい》について、単純な例を挙げる。

一月末の寒い日だった。夕暮れというよりは夜、しかし夜と呼ぶにはまだあまりに早すぎる。そんな落着きのない時間だった。

（黒井千次「黒い空の旅人―飯島耕一 1」、『石の落葉』所収）

「夕暮れというよりは夜」と「夜と呼ぶにはまだあまりに早すぎる」は、別に事柄の描写ではなく（従って列叙ではない）、同一の事態について試みた二様の描写である。的確な表現があれば、筆者は《ためらう》までもない。それが見つからないので、二つの記述を試み、言わば、そのあわいに、本当の事態を定位しようとしているのである。

（佐藤・佐々木・松尾 2006: 417）

佐藤ら の言うように、「ためらい」はあるものについて 2 つ以上ことを述べ、その 2 つの間に位置づけようとするフィギュールである。なお、佐藤らが扱っていた例では、「～というより」や「～すぎる」のように比較は用いられているものの、本論で中心的に取り扱う「X も Y もない」のように、明示的な否定を伴っている訳ではない。本論では、「X も Y もない」という明示的な否定を含んだ表現も、「ためらい」として機能する場合があることについて明らかにする。

3. 分析に用いる諸概念

本節では、分析に用いる諸概念を紹介する。1 つ目は反義の分類についての先行研究であり、Horn (1989) の提唱する opposed terms について説明する。2 つ目は緩叙法における推論と密接な関係を持つ選言三段論法について述べる。

3.1 opposed terms とは何か

Horn (1989) の提唱する opposed terms は、両立しない語と語同士の意味的関係についての分類である。図 1 は、opposed terms の分類を示したものである。まず、contradictories は *every man is white* と *not every man is white* のように、命題同士の間に成り立つ関係である。したがって、この関係は語のレベルでは成り立たない。次に、contraries (C_1) は相反する関係であればよく、他に条件はない。C_1 は mediate と immediate からなる。immediate (C_2) は偶数／奇数のように、あるカテゴリーに含まれるもの（この場合は整数）が必ず 2 つのうちどちらかに含まれ、どちらにも含まれないことがないような語と語の関係である。mediate はあるカテゴリーに含まれるもので、ある 2 つの語のどちらにも含まれない場合があるような 2 つの語の関係である。polar (C_2) は mediate に含まれる。これらは白／黒のように、2 つの間に 1 次元的なスケールである「中間性 (betweenness) 」が感じられる語と語の関係である。最後に、simple は mediate のうち、C_3 でないもので、赤／黒のような関係である。

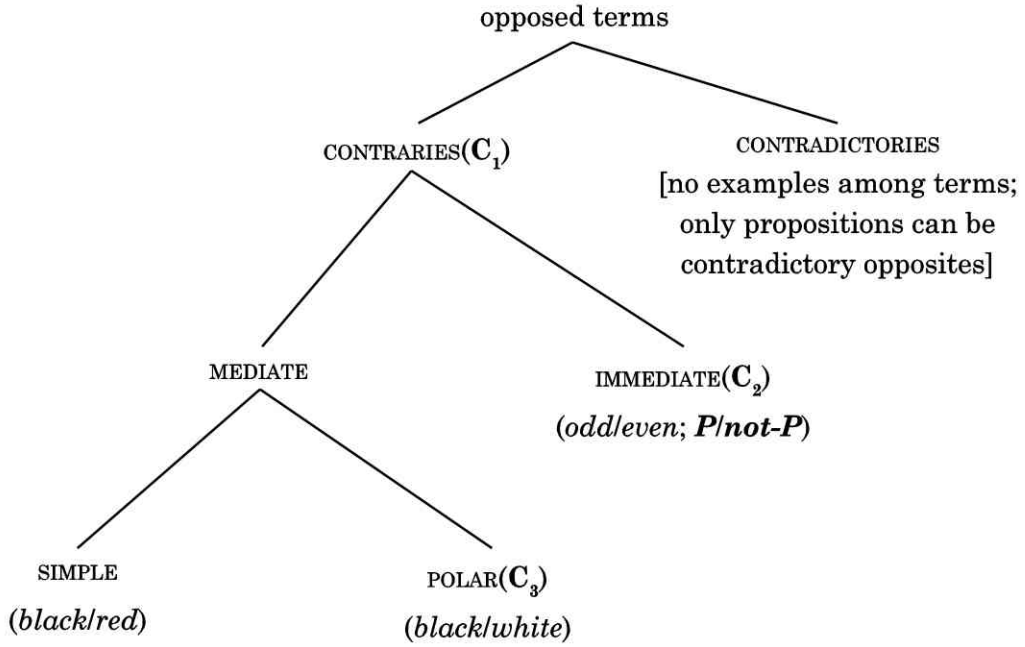

図 1： Horn (1989) による opposed terms の分類

3.2 選言三段論法

緩叙法を考える上で重要な概念として、選言三段論法 (MODUS TOLLEND PONENS) と呼ばれるものがある。次の (6) は、選言三段論法を論理記号を用いて表したものである。

(6)
$$\frac{\begin{array}{r}\mathbf{p} \vee \mathbf{q} \\ \sim\mathbf{p}\end{array}}{\mathbf{q}}$$

(*ibid*.: 272)

これは、**p** ∨ **q** が前提となっているとき、～**p** であることが分かれば **q** であることが推論できるということである。

4. 事例分析

本節では、「X も Y もない」の具体事例について考察を行う。まず、4.1 節では X と Y が opposed terms の関係にある場合に「X も Y もない」が表す基本的な意味について記述する。そして、4.2 節では 4.1 節で記述した基本的な意味の他に、実際の用例においては様々な意味を表す事例が存在することを明らかにし、それらについて考察を行う。

4.1 排中律と「X も Y もない」

「X も Y もない」における X と Y の関係を opposed terms に基づいて考えた場合、表現全体の意味が排中律に反するのは、X と Y が immediate および contradictories の関係にある場合である。本節ではこれらに加え、X や Y が polar や simple の関係にある場合についても考える。

4.1.1 immediate の場合

まず、「X も Y もない」の X と Y が immediate の関係にある場合について見ることにする。X と Y が immediate の関係にある場合、以下の (7) に示されるような容認度の低い文となる。

(7) a. ?The door is neither open nor shut.
　　b. ?The hamster was neither dead nor alive.
　　c. ?The statement that John has blue eyes is neither true nor false.

(Cruse 1986: 199)

(7) は「X も Y もない」に対応する英語 *neither X nor Y* の例であるが、これは日本語に訳しても同じような容認度判断が可能であると考えられる。

(8) a. ?そのドアは開いても閉まってもいない。
　　b. ?そのハムスターは死んでも生きてもいない。
　　c. ?ジョンが青い目をしているという言明は真でも偽でもない。

(8) についても、「ドア」が「開いている」か「閉まっている」以外の状態や、「ハムスター」が「死んでいる」状態でも「生きている」状態でもないということ、また、「言明」について「真」でも「偽」でもないことは考えにくく、特別な文脈がない限り意味的に容認しにくい。

4.1.2 polar の場合

4.1.1 節で扱った immediate の場合に対し、X と Y が polar の関係にある場合、一般的に X と Y の中間を指す表現になると言われている。例えば、Cruse (1986: 205) によれば、このような表現はあるスケールの中立的な領域を軸域 (pivotal region) と呼んでいる。この部分は、polar（Cruse の言うところの antonyms）のペアのうち、どちらの語によっても表されない領域を指す。さらに、Cruse は *tepid, lukewarm*（共に「ぬるい」を表す）のように、「熱い」と「冷たい」の間の領域を指すような例外もあるが、多くの場合、軸域はどの語彙によっても言語的に指示されない (*ibid.*)。polar のペア

を共に否定した場合、この軸域を指すことになる。具体的には、次のような例がそれにあたる。

(9) It's neither long nor short.

(Cruse 1986: 204)

(9) はあるものの長さを指すが、それは長さのスケール内の領域のうち、「長い」によっても「短い」によっても指されない領域を表している。

このような領域を指す表現について「普通の長さ」「平均的な長さ」なども考えることができるが、これについては、Sapir が次のように述べている。

> On the whole, three-term sets do not easily maintain themselves because psychology, with its tendency to simple contrast, contradicts exact knowledge, with its tendency to insistence on the norm, the "neither nor." True three-term sets are probably confined to such colorless concepts as: *inferior*, *average*, *superior*, in which middle term cannot be graded.
>
> (Sapir 1958: 133)

ここで three-term sets と言われているのは、*bad*, *averagely* (or *moderately* or *normally*) *good* のような組のことである。Sapir の言う事から分かるように、「普通の」や「平均的な」という表現を用いた場合、「X も Y もない」という表現を用いた場合に比べ、より基準に近いものしか表せないことになる。換言すれば、「X も Y もない」という表現の指す領域の方が、「普通の」や「平均的な」という表現よりも指す領域が広いとされている。

以上に挙げた Cruse や Sapir の研究は、「X も Y もない」の X と Y が immediate, polar の関係にある場合の典型的な意味の記述と言ってよいだろう。

4.1.3 simple の場合

また、simple の関係にある場合は次のように、「否定されているものの上位カテゴリーに含まれる何か」を導くために用いられている。

(10) a. ……にしても、どうもわかりにくい人である。彼の主張は<u>経済学でもなく、かといって政治学でもない</u>。あえて言えば一種の人格論とでも言おうか。たとえば大村益次郎なら、戦術論を持って……

（堺屋太一『徳川慶喜』「最後の将軍」と幕末維新の男たち、BCCWJ[3]より、下線筆者）

b.　……るというイメージがすごい。かなしみの極、太陽から飛んできたのは、鳩でもなければ雉でもない。敏捷で残酷な鵙でした。しかしその鵙は金色のオーラを放っていました。これはいった……

（小林恭二・稲畑汀子『俳句研究』2005 年 8 月号（第 72 巻第 9 号）、BCCWJ より、下線筆者）

c.　……6 つの収納スペースを造った。板張りの、ほぼ全部。床板を持ち上げると梅干でも金塊でもない、蔵書の山が現れる。これなら西日も完全シャットアウト。床下書庫の深さは 18cm……

（クロワッサン 2002 年 3 月 25 日号（No.585、第 26 巻第 6 号）、BCCWJ より、下線筆者）

(10a) では、「経済学」と「政治学」が共に否定されているが、その直後で「あえて言えば」と判断に困る様子を見せるものの、経済学、政治学と共に「学術的著作」とでも呼べるカテゴリーに含まれる「人格論」を肯定している。また、(10b) では、「鳩」と「雉」が共に否定されているが、その後に鳩や雉と同じ「鳥類」カテゴリーに含まれる「鵙」が肯定されている。(10c) では、「梅干」と「金塊」が共に否定された後、梅干や金塊と同じアドホックカテゴリー「地下に貯蔵しておくもの」に含まれると考えられる「蔵書」が肯定される。

以上、4.1 節で述べてきた事例が、opposed terms を共に否定して出来た表現の基本的な用法であると言ってよいだろう。

4.2 典型的でない「X も Y もない」の用例

4.1 節までは基本的だと考えられる「X も Y もない」の用例について見てきたが、本節では第 2 節で紹介したフィギュールとの関係を視野に入れ、非典型的な「X も Y もない」の用例について記述と考察を行う。

4.2.1 矛盾律に違反した表現との関係

矛盾律に違反した表現と、排中律に違反した表現には、規則への違反を類似した方法で回避するパターンが見られる。それは Norrick (1989: 554) で「一方の語の修正 (modifying one term) 」と呼ばれているもので、次のような例が挙げられている。

(11) K:　I can't dance, and--hell every time, every time the--the dance play--er every time there's a dance I'm always at it, an' I'm always dancin',

R:　an' yer al--yer dancing?

K:　Sure. I can't dance worth shit, I just move around hehh's all you gotta do.

(*ibid*.: 554)

(11) では、K が第 1 発言の最初に「ダンスができない」と言ったにもかかわらず、第 1 発言の最後に「いつもダンスをしている」と言ってしまったことにより、矛盾が生じている。R はその矛盾に当惑して聞き返している。そして K は *can't dance* という表現で意味してたことを説明している。

矛盾律への違反に対するこのような解決の方法は、排中律への違反の解決にも見られる。

(12) 生かさず殺さず

(12) は日本語の慣用表現だが、(12a) では「生かす」と「殺す」という immediate のペアが共に否定され、一見排中律に違反しているように見える。ここでは、「生かさず」が修正されて用いられているため、排中律に対する違反が回避されている。つまり、文字通り「生命の機能を保った状態にはしておかない」というのではなく、「生き生きとした状態にはしておかない」というような意味で用いられている。言わば、オクシモロンである「生ける屍」のような状態にしておくという意味になる。

このようなオクシモロンと共通した解決方法は創造的な例にも見られる。まず、日本語の否定接頭辞「非-」は、カテゴリーを二分するはたらきを持つとされており、久保 (2010) では次のように言われている。

> 「非-」は「あるカテゴリーに属している／属していない」を区分する、カテゴリーの否定に関わる否定接頭辞であることがわかる。そして、その語基は矛盾概念を持つものである必要がある。
>
> (*ibid.*)

したがって、「A」と「非 A」を共に否定すると、排中律に違反した表現になるといえる。このように「A」と「非 A」を共に否定した表現の実例を見てみよう。

(13) いつか見たような、でもどこでもない場所。安田悠はそんな<u>現実でも非現実でもない</u>、その狭間の、まるで夢の中のような不思議な光景を、油彩の筆跡・色味を重ねることで、遠い記憶の集積としてキャンバスに表現しています。
（http://www.tokyo-ws.org/archive/2008/06/tws-emerging097098.shtml、下線筆者）

もう一つ、思考の原理への違反の回避の仕方として、メタファーによる解決を挙げておく。

(14) *Neither Open nor Shut*: Health Information Access in Developing and

Emerging Countries.
(Neither Open nor Shut: Health Information Access in Developing and Emerging Countries. *Access to Knowledge*: *A Course Journal*、イタリックは筆者)

(14) は論文のタイトルであり、その一部に *Neither Open nor Shut* という表現が使われている。この論文では、発展途上国における生物医学の文献に対するアクセスの問題について論じている。この論文の要旨には、(15) のように書かれており、読み手には発展途上国におけるオープンアクセスが中途半端な形であることがわかるようになっている。

(15) An important contribution of the open access (OA) movement has been the improvement in access to current biomedical literature in the developing world.
...
Among these is the relatively limited scope of full-text access available through various programs, as well as a number of technical issues related to inadequate computing infrastructure.
(Neither Open nor Shut: Health Information Access in Developing and Emerging Countries. *Access to Knowledge*: *A Course Journal*)

(15) において、*Neither open nor shut* は情報へのアクセスについて表しており、開いているか閉じているかの状態しか考えることのできないドアについて述べているのではない。ここでの *open* や *shut* はメタファーとして用いられており、情報に完全にアクセスできることを *open* と表現し、完全にアクセスを遮断されていることを *shut* と表現している。すると、このメタファー的意味においては *open* と *shut* は polar のペアであると考えられる。したがって、*Neither open nor shut* という表現は結果として排中律に反する表現ではなくなる。ただし、*Neither Open nor Shut* という表現は論文のタイトルの先頭にあるため、読み手はある程度読み進めないとこの表現がメタファーであることを理解できない（少なくとも、情報に対するオープンアクセスが問題になっている事を読み手は知ることができない)。このように、メタファーとして用いられているために、字義通りの意味では immediate のペアであったものが、mediate のペアとして用いられているために、排中律を犯さなくなる場合がある。

この排中律の回避の仕方は、オクシモロンにおける矛盾の回避のパターンの 1 つと共通している。すでに述べたとおり、オクシモロンは一見矛盾しているように見えながら整合的な理解が可能な修辞的表現だが、オクシモロンにもメタファーとして理解されることで矛盾が回避される場合がある。

(16) 波子はだまつてゐたが、胸の底に、冷たい炎がふるへた。

（川端康成『舞姫』、下線筆者）

(16) で問題となるのは「冷たい炎」という表現であるが、「炎」は熱いものであり、「冷たい」という修飾語の意味と矛盾している。この字義通りの意味での矛盾は、「冷たい炎」が指し示すものが「波子」の「胸の底」にあることから、波子の心情を表しているとわかることで解決する。

4.2.2 polar のペアの否定と緩叙法

これまでの記述では、「X も Y もない」に当てはまる表現のうち、X と Y の関係が polar であるものは、基本的に X と Y の対立軸上の軸域を指すとされてきた。しかし、次の例のように軸域を指さないこともある。

(17) 包んでいる錯覚を受ける。柱や畳、天井、至るところから響きわたる水音。都会でも田舎でもない、聖地という名の空間であることを改めて認識する「大鏡様は今おられるのですか？

（麻耶雄嵩『鴉』、BCCWJ より、下線筆者）

(17) で問題にしたい表現は「都会でも田舎でもない」では、「都会」と「田舎」が共に否定されている。「都会」と「田舎」については、「賑やかさ」や「人口の多さ」など、様々な個々の対立軸が複合した「都会度」のような対立軸を考えることができ、polar のペアだと考えられる。例えば、政令指定都市のような地域を都会として考え、一面に原野が広がっているような地域を田舎と考えるような人にとっては、中核市のような地域は「都会でも田舎でもない」で表すことのできる、「都会度」の軸域に当たると考えられるだろう。これまでの研究から言えば、「都会でも田舎でもない」は「都会度」の軸域を指すために用いられるが、(17) の例では「都会―田舎」の対立軸上の領域を指すために使われてはいない。ここでは、「都会度」という対立軸ではなく、「聖地」という別の見地からその土地を評価している。

このことを緩叙法との比較から考察すると、あることを否定する場合、想定されやすい「肯定されるべき事柄」があることがわかる。第 2 節に挙げた緩叙法では、ある事柄を指すためにその反対の事柄を否定していたが、polar を共に否定した場合は軸域を指すために使われることが多く、これまでの研究ではそう述べられてきた。しかし、(17) に挙げた例で分かるように、polar の関係にある語を共に否定した表現は、必ずしも否定された事柄と同じ対立軸上の何かを指すためではない。軸域を指すという従来の記述は、むしろ会話の含意として生じるものだと考えられる。

会話の含意の持つ特徴は、推論的であることと取り消し可能である（cf. Grice 1975: 57-58, 林 2008: 6）ことだが、polar の否定により軸域を指すことは、この 2 つに当てはまる。推論的であることは言うまでもないが、取り消し可能であることは、(17) の例で明らかである。つまり、「都会でも田舎でもない、中規模の都会度の空間」ではなく、「聖地という名の空間」であることを明言することにより、都会や田舎という俗世界の対立軸で捉えられることを取り消していると考えられる。

なお、Horn によれば、緩叙法により否定される事柄の反対を意味する効果も、含意によって生じる。例えば、次のように述べている。

> ... in a context licensing the pragmatic assumption $p \vee q$, to assert ***not-p*** to implicate q.
>
> (Horn 1989: 361)

ただし、ここでの p は polar のペアのうちの一方で、無標の表現である。例えば、*long* と *short* というペアを考えた場合、*How long it is?* という表現は可能だが、*How short it is?* と表現については、特定の文脈がないと不自然だろう。したがって、*long* と *short* というペアでは、*long* が無標の表現となる。

この緩叙法の捉え方から考えると、polar のペアを共に否定することによって軸域を指すことも、一部はある種の前提のはたらきによるものだと考えることができる。つまり、polar の対立軸以外にも可能な候補があるにもかかわらず、軸域を指していると考えてしまう場合である。

(18) A 市の市役所から B 市の市役所までの距離は、近くも遠くもなかった。

(18) では、距離について述べているため、対立軸上以外で評価される場合は考えられない。つまり、「近い」「遠い」「近くも遠くもなく、普通の距離」のどれかに当てはまるだろう。しかし、 (17) の場合は、「空間」について語られており、必ずしも「都会」か「田舎」か「都会でも田舎でもない、中程度の規模の町」のいずれかである必要ではない。ここでは「聖地」といわれており、他にも「砂漠」や「大海原」のような、都会や田舎という軸では捉えきれない判断が可能だろう。しかし、「都会でも田舎でもない」という表現をされたときには、「中程度の規模の町」という含意を読み取ってしまいがちである。つまり、ここでは $p \vee q$ のような前提ではないにせよ、「p と q の対立軸上のどこか」であるという前提を設け、p と q の否定により軸域であると推定しているといえる。

ここで注意しておきたいのは、Horn (*ibid.*) の考える緩叙法と、佐藤・佐々木・松尾 (2006) の考える緩叙法が必ずしも同一ではないことである。佐藤らは修辞学の立

場から緩叙法について記述しているため、2.4 節の引用箇所でも触れられている通り、感情的ニュアンスが伴うとしている。しかし、Horn は緩叙法についてこうした感情的ニュアンスに関わる点は触れていない。両者に共通するのは、緩叙法によって指示されるのが polar の対立軸上の中間ではなく、polar の関係にある 2 つの語のうち、否定されていない側の指示する領域であるという点である。

上記の点を考慮した上で考察を行う。まず、本節（4.2.2 節）で問題にしているのは「X も Y もない」において X と Y が polar の関係にある場合についてであった。緩叙法に第 2 節で紹介した佐藤らの言う「感情的ニュアンス」を含めるかどうかの相違を考慮すると、本節で問題にした表現は、あくまでも含意によって否定されている領域以外を指すという点で緩叙法と共通しており、感情的ニュアンスは感じられないといえる。緩叙法と共通している点は、予め文脈の中で語用論的前提が認められていて、前提と与えられた表現から生じる含意によって一定の意味になるということである。緩叙法の場合は $p \vee q$ が前提となっており、p が否定されることで q であるという含意が生じる。この際、p でも q でもない部分を指すことも出来たはずであるが、この中間領域（Cruse が軸域と呼ぶ部分）を指示するという解釈にはならない。一方、「X も Y もない」については、polar の関係にある X と Y が共に否定された場合には、指示するのが polar の対立軸上にあるという前提を基にして、X にも Y にも属さない中間部分を指示するという含意が生じる。

ただし、(17) と (18) の違いが問題となる。(18) では「距離」について「近い」のでも「遠い」のでもないと言われており、そもそも「距離」という対立軸について語られているので、暗黙に想定された前提というよりは明示的な前提である。これに対し、(17) のような polar のペアは、先にも述べたとおり対立軸上以外にも様々な候補が考えうる。つまり、「都会」と「田舎」には一定の対立軸が考えられるものの、「空間」について述べる場合には、必ずしもこの対立軸上を指示する必要はない。それにもかかわらず、「私の住んでいた場所は都会でも田舎でもなかった」というような場合には対立軸上の「都会」でも「田舎」でもない部分を指示しているという含意を読み取りがちである。ここでは、「都会と田舎という対立軸上のどこかを指す」という前提が関わっているといえる。

したがって、緩叙法と密接に関わりがあるのは、このように必ずしも対立軸上を指示していると考えなければならない場合ではないものの、特別な文脈がない限り生じる前提により軸域上が指示されることになる (17) のような例であると考えられるだろう。

4.2.3 「どっちつかず、はっきりしない」を表す否定

相反するものを共に否定する表現には、「どっちつかず」や「はっきりしない」というような意味を表す慣用表現がある。これは、英語にも日本語にも見られる。

(20) a.　海のものとも山のものともつかない
　　b.　neither one thing nor the other　(= どっちつかずではっきりしない)

ここでは、否定されている別の何かを指そうとして 2 つのものを否定しているという含意はなく、むしろ「どちらにも決めがたい」「はっきりしない」という意味を表すために使われている。(20a) では何かについて「海のもの」「山のもの」以外にも「里のもの」「川のもの」など様々な候補が考えられるうち、「海のもの」「山のもの」という 2 つのみを否定する事で、「里のもの」など他の候補を含意することもなく「よくわからない、はっきりしない」ということを含意している。また、(20b) では one thing と the other の 2 つに限った上で両方を否定し、「どっちつかず」という意味を表している。

また、慣用表現だけでなく、創造的な表現についてもこのような「どっちつかず」ということを意味する事ができる。

(21) a.　今のところ、ホームスクーリングは合法でも非合法でもない曖昧な状態におかれているのだといえますが、曖昧さを解消するための動きは避けられないほどに、今後ホームスクーラーは増加すると思われます。
(http://ahsic.com/html/questions2.html、下線筆者)

　　b.　ニコニコチャンネル内 YAF チャンネル (CH22) の、公式でも非公式でもない黙認アカウントです。
(https://twitter.com/NEL__jichoo、下線筆者)

　　c.　薄暗い保育器のなかの赤ん坊は、静かに成長をつづけていった。世界には、ほかに成長をつづけるものはなかった。外部から指示を与える者はなくても、保育器は赤ん坊のため、温度を調節し空気を流通させ、栄養と適当な運動を与えるのだった。
　赤ん坊は男でも女でもなかった。一人しかいない人間にとって、一つしかない生物にとって、性の区別など意味がなかった。赤ん坊は、しだいに育った。手足を動かしても、触れるものは、弾力のある柔らかいプラスチックの覆いだけだった。そして、薄暗さだけが、そのなかにみちていた。
(星新一「最後の地球人」、下線筆者)

(21a) では、「合法」と「非合法」を共に否定し、その後に「曖昧」だと述べている。また、 (21b) では、「公式」と「非公式」が共に否定されており、それは「黙認」であるという。上の 2 つは否定接頭辞「非-」によって出来た immediate の例であるが、(21c) は否定接頭辞を伴わない例である。ここでは、人間について「男」と「女」と

いう immediate のペアを否定されている。この小説は人類最後の赤ん坊について述べているため、一人しかこの世に存在しない人間について性の区別をすることに意味がないと述べている。このように、opposed terms のペアを共に否定してできる表現は、曖昧、どっちつかず、判断の欠如などを示すために用いられることがある。

4.2.4 「ためらい」と「X も Y もない」

2.5 節で見たように、「ためらい」はあるものについて 2 つ以上のことを述べ、その 2 つの間に事態を位置づけようとするフィギュールである。これを本論で取り扱っている表現を比べてみると、4.1.3 節で述べた「X も Y もない」において、X と Y が simple の関係にある表現の一部が「ためらい」として機能している。（22=10 を再掲）をみてみよう。

(22) a. ……にしても、どうもわかりにくい人である。彼の主張は経済学でもなく、かといって政治学でもない。あえて言えば一種の人格論とでも言おうか。たとえば大村益次郎なら、戦術論を持って
（堺屋太一『徳川慶喜』「最後の将軍」と幕末維新の男たち、BCCWJ より、下線筆者）

b. ……るというイメージがすごい。かなしみの極、太陽から飛んできたのは、鳩でもなければ雉でもない。敏捷で残酷な鵙でした。しかしその鵙は金色のオーラを放っていました。これはいった……
（小林恭二・稲畑汀子『俳句研究』2005 年 8 月号（第 72 巻第 9 号）、BCCWJ より、下線筆者）

c. ……6 つの収納スペースを造った。板張りの、ほぼ全部。床板を持ち上げると梅干でも金塊でもない、蔵書の山が現れる。これなら西日も完全シャットアウト。床下書庫の深さは 18cm……
（クロワッサン 2002 年 3 月 25 日号（No.585、第 26 巻第 6 号）、BCCWJ より、下線筆者）

(22) で「ためらい」となっているのは、(22a) である。(22b) および (22c) では、「X も Y もない」という表現が現れるものの、「敏捷で残酷な鵙でした」や「蔵書の山」というはっきりとした肯定が現れる。これに対し、(22a) では「あえて言えば」「～と言おうか」と、判断に困っている様子を表す表現が来ている。(22) の 3 つの例文は同じ上位カテゴリーに含まれるものを導く「X も Y もない」という表現である。しかし、佐藤・佐々木・松尾 (2006: 417) の「的確な表現があれば、筆者は《ためらう》までもない。」という指摘を考慮すれば、断言している (22b) および (22c) はこれからはずれてしまう。つまり、「X も Y もない」という表現は、迷いを表す表現を付け加え

ることによって「ためらい」を導くこともできるが、断言を付け加えることで「ためらい」ではなくなることもある。

このことは、否定の表す意味が多様であることの反映だと考えられる。例えば、有光 (2011) はあるものが否定された場合、その結果指されるものは多様であることを指摘している。例えば、(23) のように、A が *Are you angry?* と聞かれて、*I'm not angry.* と答えた場合、A の心情について様々な可能性が考えうる。

(23) (A is asked "Are you angry?")

A: I'm not angry.

a. I'm furious.

b. I'm sad.

c. I'm disappointed.

d. I'm surprised.

e. I'm happy.

f. I'm satisfied.

g. I'm tired.

h. I'm not interested in this topic.

i. I'm busy.

（有光 2011: 59）

つまり、X と Y が simple の関係にある場合に「X も Y もない」という形式で相反するものを否定する場合についても、他の可能性については様々な選択肢が存在する。その可能性について断言することもでき、「ためらい」を表すことができる。

この「ためらい」を表すための表現は、先に挙げた (22a) に含まれている「あえて言えば」の他にも、「X とも Y ともつかぬ」が典型的なものとして考えられるだろう。例えば、(24) の例がそれに当たる。

(24) 小さな砂州で海と隔てられた<u>川とも沼ともつかぬ湿地</u>の中にぽつんと小さな小屋が建って、たしかにあの風景でした。

（http://www.kimurass.co.jp/doutou.htm、下線筆者）

(24) では、湿地であることは示されているものの、その湿地の種類が「川」であるのか「沼」であるのか、判断に困っている様子を表している。「X とも Y ともつかぬ」は「と」や「つか」という語が付け加えられているため、厳密には本論で扱った「X も Y もない」とは異なるが、相反するものの否定が「ためらい」に関わる例であり、双方の関係の強さが推察される。

4.3 「X も Y もない」の修辞学的扱い

4.1 節と 4.2 節まで、X と Y が opposed terms の関係にある「X も Y もない」とその関連表現について見てきた。ここで、再度 Crevier の説を検証してみよう。2.3 節でみた Crevier (1765) の分類では、オクシモロンを *Tour de Paradoxe* という章の中で扱っており、思考の原理に反する表現という特徴でひとまとめにし、その機能についてはあまり重視していなかった。しかし、本節で見たとおり、「X も Y もない」のうち、相反するものを共に否定する表現は、むしろ 4.2.3 節で見た緩叙法や、4.2.4 節で見た「ためらい」との関係が強い。勿論、4.2.1 節で見たようなメタファー的転義が関わる用例も見られ、オクシモロンとの関係もあるが、他のフィギュールとの関連も考慮に入れると、オクシモロンとの関係は多くのうちの 1 つという位置付けになるだろう。

また、「X も Y もない」に特徴的なのは、4.2.2 節で見た「どっちつかず」「はっきりしない」を表す例だろう。佐藤・松尾・佐々木 (2006) がいう「ためらい」が「述べたもののうちのどちらかには決めがたい」ということを表すために使われるのに対し、4.2.2 節で見た例は、「述べたもののうちのどちらかには決めがたい」というよりは、「全く判断がつかない」ということを表している。「ためらい」の定義にもよるが、この用法は修辞的であり、これまで扱われてきた「ためらい」とは別の修辞的効果をもった表現だといえるだろう。

5. まとめ

まず、日常言語と論理の関わりであるが、本論では排中律に違反する表現を中心に、矛盾律に違反する表現とも対比しながらそれらが日常言語の中でどのように用いられるかを見てきた。結果、思考の原理に違反する表現でも、日常言語においてはメタファーによる転義や、一方の語によって言おうとしていることを修正することによって、柔軟に解決されることを示した。

次に、本論では「X も Y もない」という形式に当てはまる表現が、修辞学的にどのような特徴を持つかについて示した。1 つは矛盾律に違反する表現であるオクシモロンとの関わりであり、X と Y が immediate の関係にあって排中律に違反する場合も、メタファーとして解釈する事で思考の原理への違反を回避するという共通点が見られた。また、フィギュールではないが、矛盾する表現の一方の語の意味を修正することによって矛盾律への違反を回避するパターンと同様、一方の語を修正することにより排中律への違反を回避するパターンも見られた。もう 1 つは緩叙法との関わりである。緩叙法は、肯定したい事柄の反対を否定することにより、肯定したいことを伝える表現だが、「X も Y もない」における X と Y が polar の関係にあるもののうち、「白」と「黒」の持つ対立軸に対する「青」や「緑」、「都会」と「田舎」の持つ対立軸に対する「聖地」など、他に取りうる選択肢があるにも関わらず、含意として対立軸の軸域が指される。これらは共に否定することによって生じる含意という点で似通っている。

また、前提がどのようなものかに左右される点でも共通している。

このことから得られる示唆は、これまで修辞学で規則からの逸脱の仕方として記述されてきたフィギュールを、字義通りの意味からの逸脱とその解決のパターンという観点で見直す必要があるということである。

最後に、否定の研究としては、相反することを共に否定することで生じる意味の多様さを示した。「X も Y もない」から指され得ることには様々な可能性があるが、その後に断言を付け加えるか、判断に迷っていることを付け加えるか、何も付け加えずに対立軸上の一部を指示したりするか、というように多様である。

また、今後の展望としては、「ためらい」と含意についての関係や、「ためらい」の形式的な特徴について、細かく探っていくことがあげられる。これらを追求した上で思考の原理に反するフィギュールを考察することで、1 つのものについて 2 つ以上のことを肯定したり否定する際、どのような意味が生まれてくるかについてより深い知見が得られるだろう。

注

1. 「ためらい」については、他のフィギュールに比べあまり知られていないため、フィギュールの一種であることを明示するためかぎカッコつきで表記する。
2. この点については、京都大学大学院生の小松原哲太氏から大変有益なコメントを頂いた。
3. 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese）の略。

引用例出典

川端康成 「舞姫」『川端康成全集第 10 巻』新潮社, 1980

星新一 「最後の地球人」『ボッコちゃん』新潮文庫, 1971 （=改版, 1987）

参考文献

有光奈美. 2011. 『日・英語の対比表現と否定のメカニズム―認知言語学と語用論の接点』 東京: 開拓社.

Crevier, Jean B. L. 1765. *Rhéthorique françoise tome II*. Paris: Sllant.

Cruse, D. Alan. 1986. *Lexical Semantics*. Cambridge: Cambridge University Press.

Grice, Paul. H. 1975. Logic and Conversation. *Syntax and Semantics* Volume 3: Speech Acts. Peter Cole and Jerry L. Morgan (ed.) New York: Academic Press, 41-58.

林宅男（編著）. 『談話分析のアプローチ―理論と実践』東京: 研究社.

Horn, R. Laurence. 1989. *A Natural History of Negation*. Chicago: University of Chicago Press.

久保圭. 2010. 「否定表現に関わる動的プロセスと価値判断について―日本語の否定接

頭辞を中心に」『言語科学論集』16: 57-77.

松尾大. 2007. 「修辞学としてのレトリック」菅野盾樹（編）『レトリック論を学ぶ人のために』4-22. 東京: 世界思想社.

Norrick, Neal R. 1989. How Paradox Means. *Poetics Today*, 10: 84-62.

Russel, Bartrand. 1912/1967. *The Problems of Philosiphy*. Oxford: Oxford University Press.

Sapir, Edward. 1958. Grading: A Study in Semantics. in *Selected Writings of Edward Sapir in Language*, Culture and Personality, David G. Mandelbaum(ed.), 122-149. Berkeley: University of California Press, 1958.

佐藤信夫. 1992. 『レトリック感覚』東京: 講談社.

佐藤信夫・佐々木健一・松尾大. 2006. 『レトリック事典』東京: 大修館書店.

コーパス

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』 (BCCWJ: Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese)